



インクルーシブな社会はすべての人が平等で公平な権利をもち、一人ひとりのウェルビーイングに向かうことができる、自由のある社会です。この社会の実現に向けて、人間の潜在能力（ケイパビリティ）が発揮できることの重要性を、ノーベル経済学賞をとったアマルティアセンがうたっています。

インクルーシブな社会に向かう社会の状態像には、図1のように、エクスクルージョン、セグレグーション、インテグレーション、インクルージョンの4つの段階があります。

1つめの左上のエクスクルージョンは、排他、排斥の状態です。これは、ある社会の周りに、高齢者、障害のある人、女性、子どもなど、社会に排他、排斥されている人々が社会に参加できない状態を示します。

2つめの右上のセグレグーションは、分離の状態です。インクルージョンの状態、排他された人々が、集団となって小さな社会をつくり、大きな社会と小さな社会が分離している状態を示します。この状態では、小さな社会は自治を持って独立しています。

3つめの左下のインテグレーションは、統合と呼ばれる状態です。小さな社会である円が、大きな社会の円の中に入った状態を示しています。この状態の小さな社会には、社会を表す円の周りに壁があります。

最後に4つめの右下のインクルージョンは、包摂、包含、包括の状態です。インテグレーションで、小さな社会の周りにあった壁が取り払われ、すべての人々が大きな社会の円の中にいる状態です。この状態像が、インクルージョンであり、その社会をインクルーシブ社会と呼びます。つまり、高齢者も若者も、障害のある人もない人も、男性も女性も、すべての人が共生する社会の状態像を示します。

インクルーシブな社会というと、排他されていた障害のある人が社会に包摂されることを連想してしまいがちですが、ここでは、様々な人々が暮らす社会で、多様性社会とも呼びます。

インクルーシブな社会を、私たちはどのようにすることが大切でしょうか。そこで必要なのが「教育対話」です。英国ケンブリッジ大学とのインクルーシブ社会に向けた国際共同研究は、教室の中での子どもと教師、子どもと子ども同士の「対話」に注目して、「教育対話（Educational Dialogue）」研究プロジェクトが進められています。

「教育対話」の理念は、子どもたちが、ウェルビーイングに向かう社会を自分自身の力で切り開いていくためには、子どもたちが自らの言葉を使って、自らの考えを主張したり、他の人の言葉をよく聞き、他の人との対話を通して、相手との考えの違いを考えたり、相手の考えを尊重することを学ぶことが大切だと考えます。「対話」は、インクルーシブ社会に生きる子どもたちを育成する、具体的な教育方法のひとつです。

対話に似た言葉に、会話があります。対話と会話の大きな違いは、「インナーシンキング（心の中の思考）」があるか、ないかです。対話には、「インナーシンキング（心の中の思考）」がありますが、会話にはありません。対話は、Dialogue(ダイアログ)と言いますが、Dia という接頭語は「2つの間」を表します。つまり、対話は、私と相手がいれば、はじめて成立します。そしてそのとき、私と相手だけでなく、私と私の中の「もう一人の私」がいて、その「2つの間」にも対話があります。

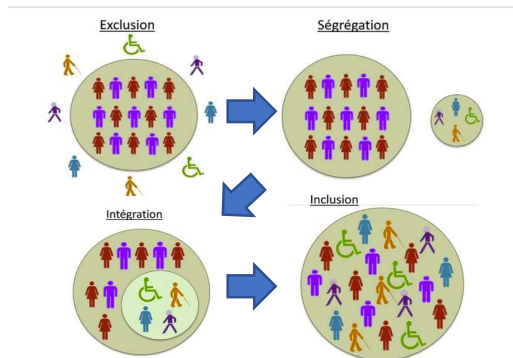


図 インクルーシブ社会に向けた社会の状態像



図 教育対話のためのガイドブック

教育対話には、話と話をつなげたり、関係づけたりする関連の対話、話と話を積み上げていく累積する対話、人の話を聞きながら考える傾聴の対話、自分の考えと相手の考えをぶつけ合う討論や議論といった対話、自分の行為や情動を振り返る対話など、いろいろな種類があります。そのどれもが、自分の「インナーシンキング（心の中の思考）」をともなった対話です。

現在、『教育対話のためのガイドブック』は、教師編が発刊され、フランス語、スペイン語、中国語、ヘブライ語、そして、日本語に翻訳され、世界の多くの国で活用されています。今後、子ども版、保護者版が発刊される予定です。

子どもたちの対話の醸成期は、学童期前の幼児期から既に始まっています。教育対話の醸成は、学校教育に限らず、家庭教育でも地域教育でもできます。

ご家族は、お子様とどのような対話をされていますか。お子様の対話の相手は、お母さんでも、おじいちゃん、おばあちゃんでも、または、ご近所の大人・・・など、いろいろな人との対話によって、子どもたちが、自分の中の私と対話できるような教育対話をしていることが大切です。次のような日常的な場面で考えてみましょう。

お母さん：「みっちゃん、アイスクリームとアイスキャンディとどっちを食べたい？」

みちる：「アイスクリーム」

いつもなら、「はい、どうぞ。」とみちるさんはアイスクリームを食べます。でも、お母さんが言葉をつなげてあげると、

お母さん：「なぜ、アイスクリームがいいの？」

みちる：「うーん、アイスクリームのほうが、スプーンで食べられて食べやすいから。」

このように、お子様との対話をつなげたり、積み重ねたりすることから、子供たちが「インナーシンキング（心の中の思考）」の対話をすることができます。つなげる対話や積み上げる対話は、ご家庭でもできますので、是非、お子様との対話を拡げてみてほしいと思います。

インクルーシブ社会では、子どもたちがさまざまな人たち、多様な人たちと出会い、対話していく中で、相手の考えを知り、理解し、受け止め、受け入れるという「インナーシンキング（心の中の思考）」の大切さを述べてきました。

お子様の発達段階や発達の状況に応じて、育てていただけたらと思います。

参考文献：

荒巻恵子著 『インクルージョンとは何か？多様性社会での教育を考える』 日本標準

CEDiR 教育対話研究チーム著 荒巻恵子ほか訳 『教育対話のためのガイドブック（教師編）』

ケンブリッジ大学出版



<プロフィール> 荒巻 恵子（あらかまき けいこ） 帝京大学大学院教職研究科教授

子どもたちとの出会い、先生がたとの出会い、保護者との出会い。たくさんの出会いの中で、人が豊かになるのは、学校という場が、すべての人の学びの場であるためだと思います。インクルージョンが問われている多様性社会の中で、次代を生きる子どもたちの未来を、みんなで考えていくことは、現代を生きる私たちの使命です。先人たちと同様、いつの時代もよりよく生きるという「ウェルビーイング」を追究していくとき、教育の意義が見えてくると思います。皆さんとともに、一緒に考えていきたいと思っています。よろしくお願ひ致します。

